

## 大学通信教育の現状と課題(2)

### —— 学習状況の分析から ——

神 谷 正 義

#### 1. はじめに

教育の本質が人間の基本的な生き方と不可分であるとするならば、その人間によって形成される社会と切り離して教育を議論することは空虚なものとなる。とりわけ今日の社会の急激な変化に伴ない、大学の在り方も大学審議会をはじめそれぞれの大学において真剣に問われ検討され始めた。

臨時教育審議会の数次にわたる答申を待つまでもなく世界の動向として生涯学習・教育が提唱されて久しくなってきた今日まで、日本の高等教育機関である大学は社会の変化に対応することも少なく、戦後の初等・中等教育の拡充の上に安穩としてきた感すらある。従来の学校教育偏重の反省の上に立った生涯学習・生涯教育の生涯はたんに生まれてから死に至るまでの時間的経過を表わすものだけでなく生活の場の拡大やそこに生きる人間の生命観・価値観と深くかかわることを意味している<sup>1)</sup>。

このような生涯教育、生涯学習社会の到来を迎えて大学通信教育課程も通学課程のエピゴーネンとして機能するのではなく、通学課程ではできない、換言すれば通信課程でなければできない教育機能をさらに拡充し、時間的、空間的制約を超えてまさに大学を開放すべき時期といえるが、残念なことにそこまでいたっていないのが現状である。というよりは、多くの志願者(入学者)を迎えている者のその学習者の目標達成率はあまりにも低い。

今かりに大学通信教育課程の卒業率を8%とした時、この数値が通学課程(同じ大学として)の卒業率であれば、社会は等閑にふすことはなく、大きな社会問題になるであろうことは想像に難くない。通学課程と通信課程はその教育方法を異にするものであって、もとより大学として本質的には同一と考えられる。こうした考え方に対して通信課程は生涯学習という観点に立って学習者の主体的な学習活動を基本として成立していると主張して卒業率の低いことを当然視する立場も予測されよう。勿論、自学自習を基点として成り立っていることを筆者も認めるところであるが、しかし、だからといって学習者の主体的な学習にのみ期待し何等そこに通学課程にみられるような教育・指導が施されなくてもよいということにはならないであろう。逆に言えば社会的、経済的、家庭的な諸側面から学習環境を左右されやすい通信課程に学ぶ学生の実態を把握し、学習条件の不十分な学生が通信課程に学ぶ学生であるとの認識に立って、

いかなる教育，指導を為すべきかが模索されるべきではなかろうか。

こうした観点に立って学生の学習状況をとらえる時，学習者の学習の実態・課題は同時に大学における課題でもあるということになる。

しかし，通信課程に学ぶ学生の学習実態は十分に調査されているとはいえない。5年毎に私立大学通信教育協会が実施する『実態調査報告書』<sup>2)</sup>や，佛教大学通信教育部研究室による『通信教育学生の学習動向の現状と課題』<sup>3)</sup>の刊行の他はあまり見られない。従って，これらの刊行物から大略，通信学生の学習状況を把握することは可能であるが，学習の内実を十分に把握することは不可能である。こうした反省に立って，拙論では佛教大学通信教育課程に在籍する本科生（卒業を目標とする者）約9000人と1988年9月30日以降1990年9月30日までに除籍された約2700人の学習の成果を分析することを通して，通信学生の学習上の課題，大学の課題について明らかにしようとするのが主目的である。

2. 除籍者の状況

除籍者<sup>4)</sup>について言及する前に通信課程における卒業率をみってみる。すでに指摘したように極めて低い。1985年3月以降1991年3月31日までの間における最短期間で卒業した者の率は表(1)の通りである。

表(1) 1年次入学者の4年後の卒業率（前期生対象）

卒業時期	A 卒業生数	B 卒業生の入学時の入学者数	$\frac{A}{B} \times 100$ (%) = 卒業率
1985.3	98	1,014 (1981.4.入学)	9.7
1986.3	97	963 (1982.4. 〃 )	10.1
1987.3	107	1,047 (1983.4. 〃 )	10.2
1988.3	105	976 (1984.4. 〃 )	10.8
1989.3	97	1,120 (1985.4. 〃 )	8.7
1990.3	113	1,273 (1986.4. 〃 )	8.9
1991.3	121	1,449 (1987.4. 〃 )	8.4
平均	738	7,842	9.4

高卒を最終学歴とする者の最短期間での卒業率は平均で9.4%である。これに対して短大大学卒業を入学資格として編入学してくる者の卒業率は1年次入学者よりも低く，表(2)のとおりである。

表(2) 編入学者の2年後の卒業率（前期生対象）

卒業時期	A 卒業者数	B 卒業者の入学時の入学者数	$\frac{A}{B} \times 100$ (%)
1985.3	27	570 (1983.4.入学)	4.7
1986.3	59	607 (1984.4. 〃 )	9.7
1987.3	38	583 (1985.4. 〃 )	7.1
1988.3	36	575 (1986.4. 〃 )	6.3
1989.3	31	597 (1987.4. 〃 )	5.2
1990.3	84	907 (1988.4. 〃 )	9.3
1991.3	62	987 (1989.4. 〃 )	6.3
平 均	337	4,783	7.0

因みに後期生の卒業率は更に低く1年入学者で平均5.4%，編入学者で平均4.1%である。これらのデータから関連していえることは後期入学者および編入学者は前期入学の1年次入学者よりも極めて卒業率が低いことである。こうした点は二学期制を導入している通信課程が学習システム（事務上の）の上で、後期生が学習を進める点で不備な面を有していることを指摘していると考えられる。また1年次入学者よりも高学歴者の方が卒業率が低い点はたんに通信課程に学ぶ学生の学力上の問題以外の諸要因が介在していると考えられる。この点については編入時の単位認定の問題を含めて別稿で論じたい。

以上卒業率をながめてみたが、卒業率をはるかにこえる中途離籍者の内、除籍者についてながめてみたい。1991年3月31日付で除籍された者が1,146人である。そのうち、1990年4月に入学した、いわゆる1年の在籍で除籍となった者が449人であって、同じ1990年4月入学者2,961人の15.2%に相当する。さらに1990年4月から1991年3月31日までに依願退学した者が156人おり2,961人の5.3%に相当し、除籍者と退学者を合すると20.4%にも達し、卒業率の2倍強が入学後1年間で大学を離れていくことになる。換言すれば入学者の5人に1人が1年間で目標を達成せずしてドロップアウトしていくことになるのである。

1988年9月30日以降1991年3月31日までの除籍者は表(3)のとおりである。

表(3) 除籍者数および除籍率

	除 籍 日	除籍人数	A 入学1年限りでの 除 籍 者 数	B 同時期入学者数	$\frac{A}{B} \times 100$ (%)
1	1988.9.30	272	107	653	16.4
2	1989.3.31	873	397	2,454	16.2
3	1989.9.30	324	128	702	18.2
4	1990.3.31	983	427	2,743	15.6
5	1990.9.30	325	133	811	16.4
6	1991.3.31	1,146	449	2,961	15.2

前期・後期によって除籍率は多少異なるが各々の3年間の平均をとると、前期で15.6%、後期で15.7%とほとんど等しい。

今ここでは表(3)の1～5の除籍者の学習の状況を、男女別、学歴別、資格取得の有無、スクーリング単位の修得状況、レポート、科目認定試験の可否の問題、全く単位を修得していない者の状況といった点から分析したい。

まず初めに1989年3月31日付除籍者の状況は表(4)のとおりである。

表(4) 1989年3月31日付除籍者(873人)の状況

入学年度	A 除籍 人数	性 別		学 歴			G 論文のみ および1 ・2科目	H 資 格 取得希望	I スクーリング 単位のみ の 修 得	J リポート 試 験 不 合 格	K 修得単位 無 し
	B 男	C 女	D 高卒	E 短卒	F 大卒						
1972	1	1		1			1			1	
1973	2		2	1	1		1	2		1	
1976	2	1	1	1		1	1	2		2	
1977	4	1	3	3		1	4	3		3	
1978	1		1	1		1	1				
1979	7	2	5	3	3	1	3	4		4	
1980	9	3	6	7		2	5	1		7	
1981	17	7	10	13	1	3	4	7	3	10	
1982	37	17	20	31	5	1	6	20	7	18	1
1983	42	20	22	28	9	5	6	21	12	19	2
1984	48	14	34	25	19	4	4	15	11	22	
1985	57	29	28	42	6	9	3	20	22	22	6
1986	88	33	55	53	24	11	3	30	33	27	11
1987	161	76	85	115	20	26		35	54	44	53
1988	397	160	237	244	97	56	1	99	45	40	297
計	873	364	509	567	185	120	49	261	187	220	370

1人ではあるが在籍期間16年の者がおり、卒業所要単位は卒業論文と1科目の科目認定試験不合格分を残すのみで除籍となっている。現に25年間在籍している者あるいは81才の高令者も在籍している。除籍者の内49人・5.6%( $\frac{G}{A}$ )ではあるが、卒業所要条件として卒業論文のみ、あるいは卒業論文とあと1・2科目の状況まで学習を進め断念するに至っている。こうした点は事務局と卒論指導教授の連携を密にすることによってよほどまで克服できるであろうが、卒論への取り組みについては後に述べることにする。873人中、全く修得単位のない者で除籍された者の内訳は表(5)のとおりである。

表(5) 除籍者中0単位(370人)の学歴別、性別比率

	男	(比 率)	女	(比 率)	計 (比率)	1990年の場合
高卒	( 79)	102( 63.8%)	( 99)	119( 56.7%)	221( 59.7%)	235( 57.0%)
短卒	( 15)	18( 11.3%)	( 58)	67( 31.9%)	85( 23.0%)	99( 24.0%)
大卒	( 27)	40( 25.0%)	( 19)	24( 11.4%)	64( 17.3%)	78( 18.9%)
計	(121)	160(100.0%)	(176)	210(100.0%)	370	412

左の( )内数は1年で除籍となった者の数値

次に在籍期間中に全く単位の修得がないケースである。1982 年入学者（6 年間）1 人をはじめ 370 人にも及び除籍者の 42.4%にも達している。さらに入学後 2 年で除籍される者（161 人）の 32.9%(53 人)もあり、入学後 1 年で除籍される者（397 人）の 74.8%(297 人)を占めている。0 単位の者の学歴別・性別の比率は表(5)のとおりである。

0 単位者で 1 年で除籍となる者は男子の 75.6%に比べて女子は 83.8%と高い。さらに高卒者では女子（56.7%）に比べて男子の除籍率は 63.8%と高く、同様に大卒者においても女子（11.4%）を大きく男子（25.0%）が上廻っている。しかし短卒では男子の 11.3%に比べて女子は 31.9%と高い割合を占めている。

次に除籍者 873 人を年令区分でみると次のようなことがいえる。

表(6) 1989 年 3 月 31 日付除籍者の年令区分およびその内の入学 1 年で除籍された者の比率

年令区分	総 数	男	女	入学後 1 年で除籍になった者 (397人)			1990 年の場合
				総数	男	女	
18～22	149( 17.1)	77( 21.2)	72( 14.1)	116( 29.2)	56( 35.6)	50( 21.1)	189( 19.2)
23～29	321( 36.8)	139( 38.2)	182( 35.8)	131( 33.0)	54( 33.8)	77( 32.5)	354( 36.0)
30～39	202( 23.1)	77( 21.2)	125( 24.6)	67( 16.9)	20( 12.5)	47( 19.8)	215( 21.9)
40～49	148( 17.0)	45( 12.4)	103( 20.2)	69( 17.4)	22( 13.8)	47( 19.8)	171( 17.4)
50～59	40( 4.6)	14( 3.8)	26( 5.1)	20( 5.0)	5( 3.1)	15( 6.3)	45( 4.6)
60～	13( 1.5)	12( 3.3)	1( 0.2)	4( 1.0)	3( 1.9)	1( 0.4)	8( 0.8)
計	873(100.0)	364(100.0)	509(100.0)	397(100.0)	160(100.0)	237(100.0)	982(100.0)

( ) は比率

表(6)の左側からいえることは、男子は 18～22、23～29 歳で女子を上廻り、逆に 30 歳台、40 歳台で女子が男子を上廻っている。さらに特徴的なことは表(6)の右側にみられるように、入学後 1 年で除籍となる者の内で 18 歳から 22 歳までの男子が圧倒的に高い比率を占めていることである。先に指摘したようにこうした傾向は除籍者中における 0 単位者の占める傾向と類似している。表(5)では 0 単位者で高卒者の占める割合（入学後 1 年で除籍となる者）が女子 47.1%に対し男子では 65.3%と約 1.4 倍である。こうした点からも高卒男子（18～22 歳）の通信学習への取り組み（学力を含む）が検討されなければならない。すでに別稿にて高卒直後の入学者の増加とりわけ男子の増加については論じているが学力に的を絞って論じたいので別の機会としたい。

除籍者の内に占める 0 単位者の比率は表(4)のとおりで入学 1 年目においては 370 人中 297 人・74.8%を占めているが、0 単位者 370 人の年令分布は表(7)のとおりである。

この表(7)にあっても男子の 18～22 歳は女子の 13.3%を大きく上廻って 27.5%にもなっている。

次に資格取得希望者が除籍者の約 3 割（ $\frac{H}{A} \cdot 29.9\%$ ）を占め、3 人に 1 人が卒業にあわせて資格の取得をめざしており、除籍となる者がたんに学習意欲がないということだけでうけとめ

表(7) 除籍者中の0単位者の年令区分比率

年令区分	男 (160人)	女 (210人)	計 (370人)	1990年の場合
18～22	44 (27.5%)	28 (13.3%)	72 (19.5%)	79 (19.2%)
23～29	55 (34.4%)	70 (33.3%)	125 (33.8%)	137 (39.3%)
30～39	28 (17.5%)	48 (22.9%)	76 (20.5%)	101 (24.5%)
40～49	18 (11.3%)	52 (27.8%)	70 (18.9%)	76 (18.4%)
50～59	11 ( 6.9%)	12 ( 5.7%)	23 ( 6.2%)	18 ( 4.4%)
60～	4 ( 2.5%)		4 ( 1.1%)	3 ( 0.7%)

ることはできない。こうした点は次のレポート，科目認定試験において不合格を経験することによって学習継続を困難にしている状況からいえる。すなわちレポート・科目認定試験に不合格になることによって学習の自信をなくし，今後の学習の仕方に不安を抱くことによって学習の継続が困難になるケースである。私立大学通信教育協会の『実態調査』でも指摘するように，学習者は学習の成果の確認が十分できないことをあげている。こうした点からも，レポートの添削指導にあっては学習者のレベルに（レポート内容の状況）応じた適切にしかつ具体的な指導が強く求められるところであり，通信課程における指導体制とも深く関わっている問題といえる。除籍者に占めるレポート・科目認定試験不合格者の割合（ $\frac{J}{A}$ ）は25.2%で4人に1人の比率であって0単位者について高い比率を示すものである。

こうした点の傾向を見るためにも，1990年3月31日付除籍者の状況（表(8)）をながめてみたい。

表(8) 1990年3月31日付，除籍者（982人）の状況

入学年度	A 除籍 人数	性 別		学 歴			G 論文のみ および1 ・2科目	H 資 格 取得希望	I スクーリング 単位のみ の 修 得	J レポート 試 験 不 合 格	K 修得単位 無 し
		B 男	C 女	D 高卒	E 短卒	F 大卒					
1968	1	1		1				1			
1970	1	1			1			1			
1976	2		2	2			1	1		1	
1977	2	1	1	1		1	2	2		1	
1978	2	1	1	2			1			1	
1979	5	3	2	4		1	2	3		2	
1980	5	1	4	3	2		1	3	1	3	
1981	14	7	7	10	1	3	4	5	3	5	
1982	18	7	11	11	3	4	2	9	3	7	
1983	30	13	17	22	5	3	6	7	1	14	1
1984	40	17	23	30	3	7	4	19	5	20	2
1985	57	18	39	38	12	7	5	21	19	22	3
1986	68	36	32	43	15	10	3	26	18	27	10
1987	117	52	65	77	22	18	3	28	38	41	21
1988	193	94	99	103	39	51	6	60	54	43	72
1989	427	181	246	261	100	66	2	100	76	62	303
計	982	433	549	608	203	171	42	287	218	249	412

まず男女比であるが1989年では男子40.3%、女子59.7%であったものが1990年では男子が44.1%と高くなり逆に女子が55.9%に下がっている。

学歴別では高卒者は変化なく、短卒は1989年では24.4%であったものが1990年では20.7%と下り、逆に大卒が14.1%から17.4%へと上昇している。さて1989年の項でも指摘した点を1990年で眺めてみると次のようになっている。

卒業論文および数科目を履修することによって卒業に至り、合せて資格をも取得できる者が42人(4.3%)おり、資格取得希望者が287人(29.2%)いる。また単位修得が全くない者が412人(42.0%)もあり、1989年と同様の比率である。さらにレポート、科目認定試験不合格による学習停滞者も1989年と同様249人(25.2%)と依然高い数値を示している。

1989年度の段階で触れなかった除籍者の内におけるスクーリング履修による単位のみ修得しているケースについてである。在学中にレポート、科目認定試験によるすなわちテキスト(教材)履修による単位の修得は全く見られず、スクーリングによる単位のみを修得して除籍となっている者が1989年では187人(21.4%)、1990年で218人(22.2%)もいることである。彼らは全くりポートを作成(提出)しておらず後述するように0単位者同様、除籍対象者と考えられる者である。通信教育の根幹はどこまでも教材履修であり、それに対応できない多くの学生がいることを表わしている。

ここで気づかされることは、除籍者の内訳として、1990年を例にとれば、982人中、0単位者(K)が412人おり、スクーリングによる単位のみ修得者(I)218人を合すると630人((I)+(K))となり、除籍者全体982人の64.2%を占めるのであるが、入学後1年にして除籍される者の場合でみると、0単位者(K)303人、スクーリング単位のみ修得者76人(I)を合すると379人となり、427人の88.8%を占めることになるのである。こうした点からいえることは、入学1年目にテキスト履修への取り組みに対する徹底した指導とその充実を図ることと、少しでもスクーリングへの参加を促し、学習意欲への刺激を与えることが肝要であるといえる。そうした面からも『実態調査』に指摘されるように、スクーリング受講方法・開講が検討されなければならないし、かつ学習方法になじまない者や、大学教育の経験のない高卒者に対しては学習方法・内容にわたって適時に担当者によって指導される場(学習会等)が設定されることも極めて重要な施策といえるであろう。

以上は前期入学(除籍)者を対象としてきたが、後期のそれは前期と数値も異なるところがあるため前期と対応させて示すことにする。あわせて入学後1年にして除籍される者の特徴が際だっているのもそれと呈示(表(9))したい。

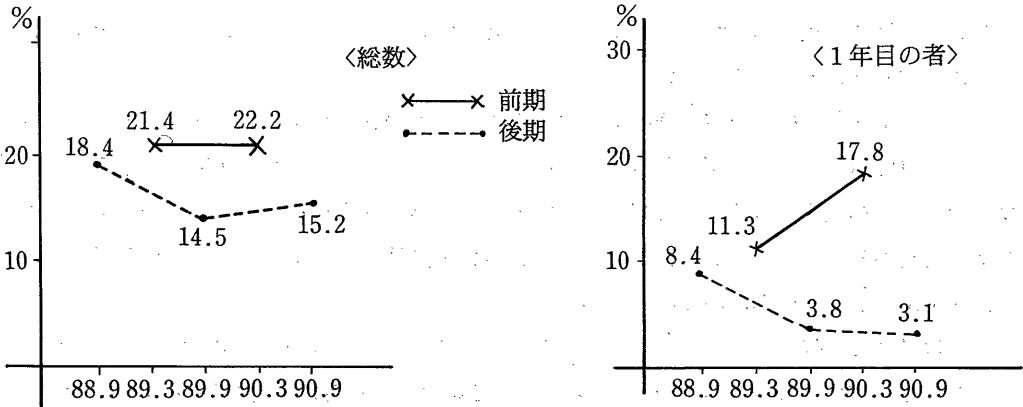
表(9) 後期・前期の除籍者の状況

期 別	除 籍 年 度	A 除 籍 人 数	性 別		学 歴			G 論文のみ および1 ・2科目	H 資 格 取得希望	I スクーリング 単位のみ の 修 得	J リポート 試 験 不 合 格	K 修得単位 無 し	B A	C A	D A	E A	F A	G A	H A	I A	J A	K A
			B 男	C 女	D 高 卒	E 短 卒	F 大 卒															
前 期	1989. 3.31	873	364	509	567	185	120	49	261	187	220	370	41.7	58.3	65.1	21.2	13.7	5.6	29.9	21.4	25.2	42.4
	上 記 の 内 1 年 目 の 者	397	160	237	244	97	56	1	99	45	40	297	40.3	59.7	61.5	24.4	14.1	0.3	24.9	11.3	10.1	74.8
	1990. 3.31	982	433	549	608	203	171	42	287	218	249	412	44.1	55.9	61.9	20.7	17.4	4.3	29.2	22.2	25.4	42.0
	上 記 の 内 1 年 目 の 者	427	181	246	261	100	66	2	100	76	62	303	42.4	57.6	61.6	23.4	15.5	0.5	23.4	17.8	14.5	70.9
後 期	1988. 9.30	272	101	171	164	67	41	8	72	50	60	130	37.1	62.9	60.3	24.6	15.1	2.9	26.5	18.4	22.1	47.8
	1 年 目 の 除 籍 者	107	32	75	57	30	20		22	9	5	88	29.9	70.1	53.3	28.0	18.7		20.6	8.4	4.7	82.2
	1989. 9.30	324	107	217	176	95	53	16	107	50	66	172	30.2	69.8	50.9	32.1	17.0	5.2	32.1	14.5	18.8	51.2
	1 年 目 の 除 籍 者	128	37	91	65	40	23		34	4	5	117	26.3	73.7	50.4	33.8	15.8		26.3	3.8	8.3	84.2
	1990. 9.30	324	98	226	165	104	55	17	104	47	61	166	33.0	67.0	54.3	29.3	16.4	4.9	33.0	15.2	20.4	53.1
	1 年 目 の 除 籍 者	133	35	98	67	45	21		35	5	11	112	28.9	71.1	50.8	31.3	18.0		26.6	3.1	3.9	91.4
5 期 平 均		2,775	1,126	1,649	1,680	654	440	132	831	552	656	1,249	40.6	59.4	60.5	23.6	15.9	4.8	29.9	19.9	23.6	45.0

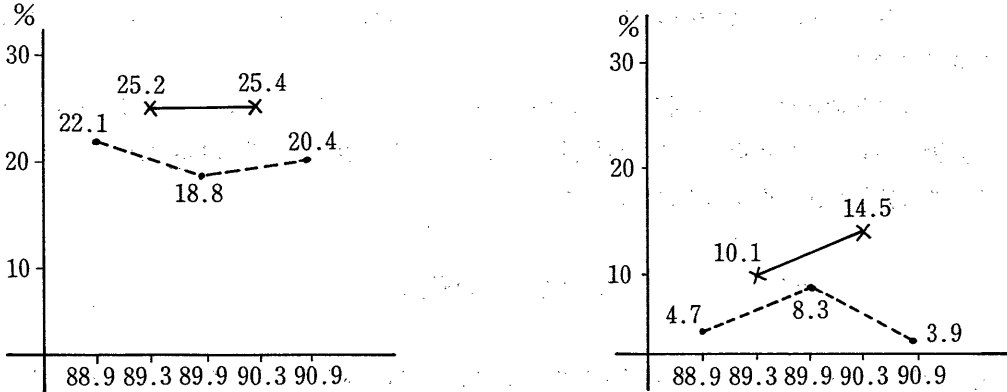


表(9)の中、特に $\frac{I}{A} \cdot \frac{J}{A} \cdot \frac{K}{A}$ の推移について折線グラフで示せば次のようになる。

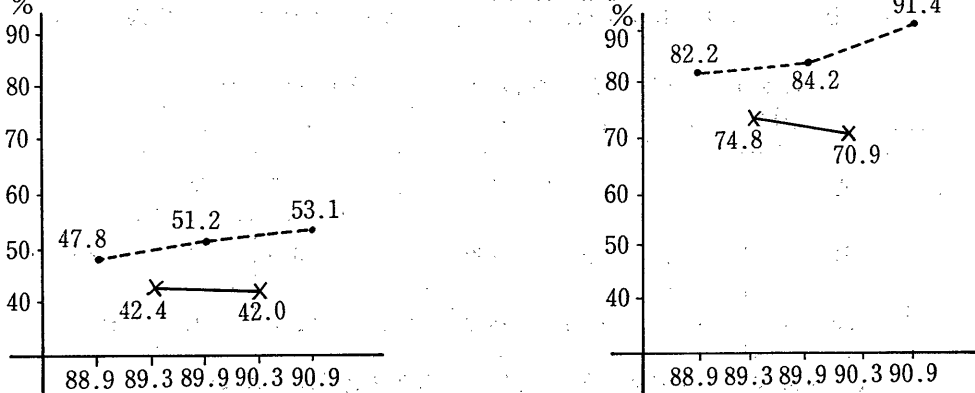
I. スクーリング履修による単位の修得のみの者の推移



J. リポート・試験不合格による学習停滞者の推移



K. 0単位者の推移



単位修得者の内でも、その修得単位がすべてスクーリング履修による者は数値からみて除籍と深い関係をもっていることを先に述べたが前期と後期とでは比率が大きく異なっている。前期は各時期ともほぼ同数値であるが、後期は18.4%、14.5%、15.2%と変化している。特に入学後1年目で除籍される者の場合にあっては前期では11.3%から17.8%と増加しているのに対し、後期では逆に8.4%から3.1%にまで減少していて、スクーリングによる単位の修得と除籍の関係はあまりみられない。

また、レポート・科目認定試験の不合格による学習停滞者と除籍との関係は、前期ではスクーリング単位修得のみで除籍になった者と同様の傾向を示しているが、後期の入学1年目で除籍になった者の場合は4.7%、8.3%、3.9%とあまり高い数値を示していないが、その数値に高低の変動がみられる。しかし、レポート・科目認定試験の不合格による学習停滞者が少ない分、0単位 ( $\frac{K}{A}$ ) の比率が高くなっている。

後期除籍に最も強くかかわっており、その比率が増加しているのが0単位者である。前期の総数では2年間とも42%台であり、入学後1年で除籍される者の場合は74.8%から70.9%へと減少している。これと全く逆に、後期除籍では総数において47.8%から53.1%へと増加し、入学後1年目で除籍される者の場合では82.2%から91.4%までになっている。除籍者の9割強が0単位者である。

このように前期除籍と後期除籍ではその傾向を異にするものの、いずれであっても除籍の大きな要因であることに相違ないことが指摘できる。これらの点を在学生の動向や年令分布、学歴や単位の修得状況の面から次に分析したい。

### 3. 在学生の動向

前節で述べたように入学1年を経過して除籍される者は同期入学者総数の約15.6%に相当しかつ入学1年以内で依願退学する者と合して20%を超える。5人に1人が離籍していくのであるが、その状況を入学後の在学年数に沿って眺めてみると表(10)-1および表(10)-2となる。

表(10)-1 1990年前期入学者の在学状況 (1年後の状況)

区分 \ 学科	B	H	L	F	E	W	計
A	204	187	196	378	337	1,380	2,682
B	172	161	169	334	310	1,234	2,380
$\frac{B}{A} \times 100$ (%)	84.3	86.1	86.2	88.4	92.0	89.4	88.7

(A=1990.4月入学者数 B=1991.7月の在学者数休学者は除く)

(Bの数値から除籍者を引くので実際は $\frac{B}{A}$ は80%程度になる)

学科によって多少の相違はあるものの1年で20%以上の者がドロップアウトしていくことになり、入学後2年を経過した時点では次のようになっている。

表(10)-2 1989年前期入学者の在学状況（2年後の状況）

区分 \ 学科	B	H	L	F	E	W	計
A 1989年度4月入学者数	166	182	200	310	298	1,432	2,588
B 1991年7月在学者数	111	120	123	218	159	967	1,698
$\frac{B}{A} \times 100 (\%)$	66.7	65.9	61.5	70.3	53.4	67.5	65.6

（ただし休学者数を除いている）

2年後の状況では学科によってバラつきが見られ出し、特にE学科（教育系）では2年修了時二種の教員免許状を取得して退学する者や教員採用試験の厳しさに教員志望を断念することによって学習を放棄する者、あるいは教育実習の実施が勤務等の都合でできない者や実習校が確保できずに教育免許状の取得をあきらめるなどの要因と相まって退学する者が見られるため、入学時の約半数にまで激減している。しかし一年目の平均80%の在学率からみるとはるかに在籍率は低下し65.6%にまでになっている。

入学後3年を経過する時点では表(11)にみられるように在籍率は5割を割って43.3%にまで下降してくる。ここで最も特徴的なのは外国文学系のF学科である。2年経過時点では70.3%(表(10)-2参照)であったものが32.9%にまで下落していることである。あわせてE学科およびW（福祉系）学科も39.4%、40.4%と著しく減少させている。その要因は種々考えら

表(11) 1988年前期入学者の在学状況（3年後の状況）

学科 区分		B	H	L	F	E	W	計
1 年 入 学	A 入 学 者 数	84	110	89	156	183	804	1,426
	B 在 学 者 数	49	57	65	84	62	440	757
	$\frac{B}{A} \times 100$ (%)	58.3	51.8	73.0	53.8	33.9	54.7	53.1
編 入 学	A	63	51	54	72	184	458	882
	B	32	22	24	22	72	70	242
	$\frac{B}{A} \times 100$ (%)	50.8	43.1	44.4	30.6	39.1	15.3	27.4
全 体	A	147	140	164	255	340	1,262	2,308
	B	81	79	89	106	134	510	999
	$\frac{B}{A} \times 100$ (%)	55.1	56.4	54.3	32.9	39.4	40.4	43.3

れるが今は省略する。さらに表(11)に見られるように学科によって著しく減少することになる場合の入学時の学歴との関連をも注意したい。概していえることは短大卒、大学卒で通信課程に入学した者の在籍率が著しく低いという点であり、1年入学者にあってはE学科が33.9%と著しく低いのは先に述べる理由によるものである。

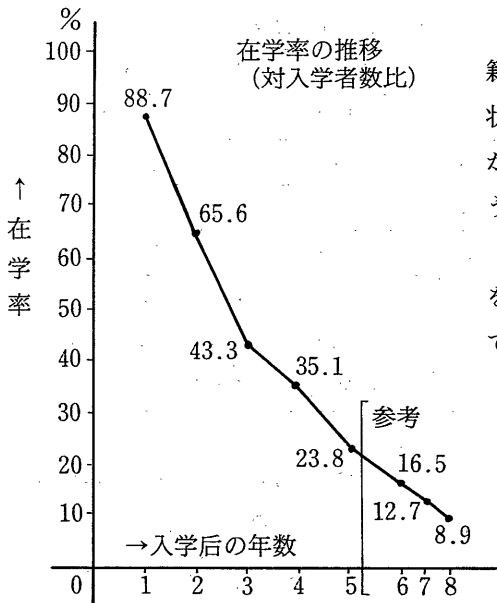
入学後4年、あるいは5年を経過した時点での在籍率は35.1%、23.8%にまで低下してくる。その内訳は表(12)-1、(12)-2のとおりである。

表(12)-1 1987年前期入学者の在学状況（入学4年後の状況）

区分 \ 学科		B	H	L	F	E	W	計
1年入学	A 入学者数	95	123	99	197	172	693	1,379
	B 在学者数	32	56	45	57	44	287	521
	$\frac{B}{A} \times 100 (\%)$	33.7	45.5	45.5	28.9	25.6	41.4	37.8
編入	A	64	52	54	74	72	257	578
	B	19	22	19	28	22	56	166
	$\frac{B}{A} \times 100 (\%)$	29.7	42.3	35.2	37.8	30.6	21.8	28.7
全体	A	159	175	153	271	248	950	1,959
	B	51	78	64	85	66	343	687
	$\frac{B}{A} \times 100 (\%)$	32.1	44.6	41.8	31.4	26.6	36.1	35.1

表(12)-2 1986年前期入学者の在学状況（入学5年後の状況）

区分 \ 学科		B	H	L	F	E	W	計
1年入学	A 入学者数	77	118	112	185	169	554	1,215
	B 在学者数	14	33	36	43	24	163	313
	$\frac{B}{A} \times 100 (\%)$	18.2	28.0	32.1	23.2	14.2	29.4	25.8
編入	A	81	60	40	65	87	209	542
	B	21	10	8	14	16	37	106
	$\frac{B}{A} \times 100 (\%)$	25.9	16.7	20.0	21.5	18.4	17.7	19.6
全体	A	158	178	152	250	256	763	1,757
	B	35	43	44	57	40	200	419
	$\frac{B}{A} \times 100 (\%)$	22.2	24.2	28.9	22.8	15.6	26.2	23.8



入学後4年経過した時点では約3人に2人が離籍し、5年後には4人に3人以上が離籍している状況である。E学科の在籍率は15.6%にまで下がり他の五学科はすべて20%になっている。こうした傾向をグラフで示すと次のようになる。

参考までにそれ以上の在学年数における在籍率を表わせば表のとおりであって8年経過した時点では8.9%までになる。

#### 4. 在学生の単位修得状況

表(12)-1に見られるように1年入学者は卒業年次を迎える4年後には8～9%が最短期間で卒業し、37.8%が5回生となり、同時期入学者の50%強が(2人に1人)退学もしくは除籍となってドロップアウトしていくことになる。では在籍1年目にどの程度の単位を修得しているのでしょうか。その内訳を示したものが表(13)-1および表(13)-2である。

表(13)-1 1990年前期入学者の1年間の修得単位数

学科	A 在籍者数	B 総修得単位数	C $\frac{B}{A}$	D 0 単位数者	E A - D	F $\frac{B}{E}$
B	172人	1,494 u	8.7 u	50人	122人	12.2 u
H	161人	1,287 u	8.0 u	42人	119人	10.8 u
L	169人	1,622 u	9.6 u	40人	129人	12.6 u
F	334人	4,123 u	12.3 u	49人	285人	14.5 u
E	310人	4,995 u	16.1 u	58人	252人	19.8 u
W	1,234人	14,587 u	11.8 u	262人	972人	15.0 u
計	2,380人	28,111 u	11.8 u	510人	1,879人	15.0 u

表(13)-2 1989年前期入学者の2年間の修得単位数

学科	A	B	C	D	E	F
B	111人	3,885 u	35.0 u	12人	99人	39.2 u
H	120人	3,921 u	32.7 u	14人	106人	37.0 u
L	123人	3,390 u	27.6 u	10人	113人	30.0 u
F	218人	7,369 u	33.8 u	13人	205人	35.9 u
E	159人	5,558 u	35.0 u	21人	138人	40.3 u
W	967人	32,711 u	33.8 u	89人	878人	37.3 u
計	1,698人	56,834 u	33.5 u	159人	1,539人	36.9 u

入学後1年で修得する単位は学科によって異なるものの平均で15単位である。卒業所要単位124単位以上からみれば卒業に要する年数は7～8年という計算になる。またE学科は19.8単位と他学科にくらべて単位数が多いのは先に述べた如く、2年修了時に二種の教員免許状を取得する者が多いためである。

1990年4月に入学し現在在籍している者は表(14)のとおりである。

表(14) 1990年前期入学者の内、1991.5.1現在の在籍者数

入学年次	性別	B	H	L	F	E	W	計	2,380人中に占める割合			
A 1年入学 (1,613人)	男	68	67	28	114	59	228	564	67.8%	23.7%	男 (779)	女 (1,601)
	女	35	53	95	149	117	600	1,049		44.1%		
B 編入学 (767人)	男	49	17	6	13	16	114	215	32.2%	9.0%	32.7%	67.3%
	女	20	24	40	58	118	292	552		23.2%		
計		172	161	169	334	310	1,234	2,380	入学年次別	性別(a)	性別	(b)

これらの各学科毎の1年間の単位修得状況を男女別、入学年次別、修得単位別に示したのが表(15)-1、(15)-2である。

表(15)-1 1990年前期入学者の単位修得状況——全体

1年間の修得単位数	1年次入学者			編入学 者			B大学全体		
	男(564)	女(1,049)	計(1,613)	男(215)	女(552)	計(767)	男(779)	女(1,601)	計(2,380)
0	120(21.3)	191(18.2)	311(19.3)	68(31.6)	122(22.1)	190(24.8)	188(24.1)	313(19.6)	501(21.2)
1～10	210(37.2)	365(34.8)	575(35.6)	93(43.3)	243(44.0)	336(43.8)	303(38.9)	608(38.0)	911(38.3)
30以上	40(7.1)	108(10.3)	148(9.2)	11(5.1)	57(10.3)	68(8.9)	51(6.5)	165(10.3)	216(9.1)

表(5)-2 1990年前期入学者の単位修得状況——学科別

学 科	性 別	1 年間 の修得 単位数	1 年 次 入 学 者			編 入 学 者			計		
			男( 564)	女(1,049)	計(1,613)	男( 215)	女( 552)	計( 767)	男( 779)	女(1,061)	計(2,380)
B (172人)	男 117人	0	17(25.0)	11(31.4)	28(27.2)	19(38.8)	3(15.0)	22(31.9)	36(30.8)	14(25.5)	50(29.1)
		1～10	25(36.8)	14(40.0)	39(37.9)	21(42.9)	12(60.0)	33(47.8)	46(39.3)	26(47.3)	72(41.9)
	女 55人	30以上	8(11.8)	0( 0.0)	8( 7.8)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	8( 6.8)	0( 0.0)	8( 4.7)
H (161人)	男 84人	0	22(32.8)	14(26.4)	36(30.0)	2(11.8)	4(16.7)	6(14.6)	24(28.6)	18(23.4)	42(26.1)
		1～10	34(50.7)	24(45.3)	58(48.3)	8(47.1)	13(54.2)	21(51.2)	42(50.0)	37(48.1)	79(49.1)
	女 77人	30以上	0( 0.0)	2( 3.8)	2( 1.7)	0( 0.0)	3(12.5)	4( 9.8)	0( 0.0)	5( 6.5)	6( 3.7)
L (169人)	男 34人	0	6(21.4)	20(21.1)	26(21.1)	2(33.3)	12(30.0)	14(30.4)	8(23.5)	32(23.7)	40(23.7)
		1～10	15(53.6)	29(30.5)	44(35.8)	3(50.0)	16(40.0)	19(41.3)	18(52.9)	45(33.3)	63(37.3)
	女 135人	30以上	0( 0.0)	2( 2.1)	2( 1.6)	0( 0.0)	5(12.5)	5(10.9)	0( 0.0)	7( 5.2)	7( 4.1)
F (334人)	男 127人	0	12(10.5)	14( 9.4)	26( 9.9)	3(23.1)	20(34.5)	23(32.4)	15(11.8)	34(16.4)	49(14.7)
		1～10	51(44.7)	52(34.9)	103(39.2)	6(46.2)	18(31.0)	24(33.8)	57(44.9)	70(33.8)	127(38.0)
	女 207人	30以上	3( 2.6)	8( 5.4)	11( 4.2)	1( 7.7)	5( 8.6)	6( 8.5)	4( 3.1)	13( 6.3)	17( 5.1)
E (310人)	男 75人	0	17(28.9)	11( 9.4)	28(15.9)	7(43.8)	23(19.5)	30(22.4)	24(32.0)	34(14.5)	58(18.7)
		1～10	18(30.5)	34(29.1)	52(29.5)	5(31.3)	52(44.1)	57(42.5)	23(30.7)	86(36.6)	109(35.2)
	女 235人	30以上	4( 6.8)	42(35.9)	46(26.1)	1( 6.3)	14(11.9)	15(11.2)	5( 6.7)	56(23.8)	61(19.7)
W (1,234人)	男 342人	0	46(20.2)	121(20.2)	167(20.2)	35(30.7)	60(20.5)	95(23.4)	81(23.7)	181(20.3)	262(21.2)
		1～10	67(29.4)	212(35.3)	279(33.7)	50(43.9)	132(45.2)	182(44.8)	117(34.2)	344(38.6)	461(37.4)
	女 892人	30以上	25(11.0)	54( 9.0)	79( 9.5)	9( 7.9)	30(10.3)	39( 9.6)	34( 9.9)	84( 9.4)	118( 9.6)

表(5)-1、表(5)-2 からいえることは0単位者についてはH学科を除き1年次入学者よりも編入学者が高く、かつL、F学科を除き女子よりも男子の方が比率が高い点である。また30単位以上を修得している比率は男子よりも女子の方が高いことである。さらに最も高い比率を示しているのが、1年次入学者および編入学者ともに1～10単位の修得単位の比率であって平均で38.3%にもなっている。この単位数は一年間にスクーリングで修得する単位数に相当し、以下に述べる0単位者と同様除籍と密接な関連を有している者である。

さらにここでも注意を引くのは0単位者が在籍者総数の21%に相当し501人もいることである。この点については2年を経過した時点での単位の修得についての後に述べることとする。2年を経過した時点では1年目の約2.5倍の36.9単位にまで修得単位が増加し、学習経験を重ねることによって成果をあげていることが知られ、第2年目の一年間で20単位以上の単位の修得がみられる。反面、第1年経過時点で21%を占めた0単位者が（多くは除籍されるが）2年目では半減し10%弱になってくる。以下、0単位者を内訳を分析する。

表(6)は 入学後1年間に全く単位の修得がみられなかった501人の内訳を学科別、学歴別、性別、年令区分別に分類したものである。

表(16) 1990年前期入学者(2380人)の内、1年間の修得単位が全くない者の内訳

学歴 学科 性	高 卒			短 卒			大 卒			全 体			年令区分
	男	女	小 計	男	女	小 計	男	女	小 計	男	女	計	
B	4(23.5)	1(9.1)	5(17.9)							4(11.1)	1(7.1)	5(10.0)	18~22
	3(17.6)		3(10.7)	1(33.3)	1(33.3)	2(33.3)	4(25.0)		4(25.0)	8(22.2)	1(7.1)	9(8.0)	23~29
	8(47.1)	3(27.3)	11(39.3)		1(33.3)	1(16.7)	3(18.9)		3(18.9)	11(30.6)	4(28.6)	15(30.0)	30~39
	1(5.9)	4(36.4)	5(17.9)		1(33.3)	1(16.7)	2(12.5)		2(12.5)	3(8.3)	5(35.7)	8(16.0)	40~49
	1(5.9)	3(27.3)	4(14.3)	2(66.6)		2(33.3)	5(37.2)		5(37.2)	8(22.2)	3(21.4)	11(22.0)	50~59
							2(12.5)		2(12.5)	2(5.6)		2(4.0)	60~
H	17(100.0)	11(100.0)	28(100.0)	3(100.0)	3(100.0)	6(100.0)	16(100.0)	0	16(100.0)	36(100.0)	14(100.0)	50(100.0)	計
	11(50.0)	4(28.6)	15(41.7)							11(45.8)	4(22.2)	15(35.7)	18~22
	4(18.2)	5(35.7)	9(25.0)	1(100.0)	3(100.0)	4(100.0)				5(20.8)	8(44.4)	13(31.0)	23~29
	2(9.1)	1(7.1)	3(8.3)					1(100.0)	1(50.0)	2(8.3)	2(11.1)	4(9.5)	30~39
	4(18.2)	1(7.1)	5(13.9)							4(16.7)	1(5.6)	5(11.9)	40~49
	1(4.5)	3(21.4)	4(11.1)							1(5.0)	3(16.7)	4(9.5)	50~59
L							1(100.0)		1(50.0)	1(5.0)		1(2.4)	60~
	22(100.0)	14(100.0)	36(100.0)	1(100.0)	3(100.0)	4(100.0)	1(100.0)	1(100.0)	2(100.0)	24(100.0)	18(100.0)	42(100.0)	計
	1(16.7)	8(40.0)	9(34.6)		4(36.4)	4(36.4)				1(12.5)	12(37.5)	13(32.5)	18~22
	4(66.7)	3(15.0)	7(26.9)		4(36.4)	4(36.4)	1(50.0)		1(33.3)	5(62.5)	7(21.9)	12(30.0)	23~29
	1(16.7)	3(15.0)	4(15.4)				1(50.0)	1(100.0)	2(66.7)	2(25.0)	4(12.5)	6(20.0)	30~39
		4(20.0)	4(15.4)		2(18.2)	2(18.2)					6(18.8)	6(20.0)	40~49
F		2(10.0)	2(7.7)		1(9.1)	1(9.1)					3(9.4)	3(7.5)	50~59
													60~
	6(100.0)	20(100.0)	26(100.0)		11(100.0)	11(100.0)	2(100.0)	1(100.0)	3(100.0)	8(100.0)	32(100.0)	40(100.0)	計
	8(66.7)	5(35.7)	13(50.0)		2(14.3)	2(1.3)				8(53.3)	7(20.6)	15(30.6)	18~22
	4(33.3)	3(21.4)	7(26.9)	1(100.0)	6(42.9)	7(46.7)	2(100.0)	2(33.3)	4(50.0)	7(46.7)	11(32.4)	18(36.7)	23~29
		5(35.7)	5(19.2)		5(35.7)	5(33.3)		2(33.3)	2(25.0)		12(35.3)	12(24.5)	30~39
E		1(7.1)	1(3.8)		1(7.1)	1(6.7)		2(33.3)	2(25.0)		4(11.8)	4(8.2)	40~49
													50~59
													60~
	12(100.0)	14(100.0)	26(100.0)	1(100.0)	14(100.0)	15(100.0)	2(100.0)	6(100.0)	8(100.0)	15(100.0)	34(100.0)	49(100.0)	計
	12(70.6)	6(54.5)	18(64.3)		12(57.1)	12(52.2)				13(54.2)	19(55.9)	32(55.2)	18~22
	5(29.4)	3(27.3)	8(28.6)	1(50.0)	6(28.6)	7(30.4)	4(80.0)	2(100.0)	6(85.7)	10(41.7)	10(29.4)	20(34.5)	23~29
W		2(18.2)	2(7.1)	1(50.0)	3(14.3)	4(17.4)	1(20.0)		1(14.3)	1(4.2)	5(14.7)	6(10.3)	30~39
													40~49
													50~59
													60~
	17(100.0)	11(100.0)	28(100.0)	2(100.0)	21(100.0)	23(100.0)	5(100.0)	2(100.0)	7(100.0)	24(100.0)	34(100.0)	58(100.0)	計
	27(58.7)	19(15.7)	46(27.5)		5(12.2)	5(10.6)				27(33.3)	24(13.3)	51(19.5)	18~22
W	16(34.8)	24(19.8)	40(24.0)	2(33.3)	13(31.7)	15(31.9)	7(24.1)	7(36.8)	14(29.2)	25(30.9)	43(23.8)	68(26.0)	23~29
	3(6.5)	31(25.6)	34(20.4)	3(50.0)	15(36.6)	18(38.3)	15(51.7)	5(26.3)	20(41.7)	21(25.9)	52(28.7)	73(27.9)	30~39
		41(33.9)	41(24.6)	1(16.7)	6(14.6)	7(14.9)	3(10.3)	6(31.6)	9(18.8)	4(4.9)	53(29.3)	57(21.8)	40~49
		6(5.0)	6(3.6)		2(4.9)	2(4.3)	3(10.3)	1(5.3)	4(8.3)	3(3.7)	9(5.0)	12(4.6)	50~59
							1(3.4)		1(2.1)	1(1.2)		1(0.4)	60~
	46(100.0)	121(100.0)	167(100.0)	6(100.0)	41(100.0)	47(100.0)	29(100.0)	19(100.0)	48(100.0)	81(100.0)	181(100.0)	262(100.0)	計



大学通信教育の現状と課題(2)

さらに年令区分を基準に学歴、性別をみると表(17)-1、(17)-2 のようになる。

表(17)-1 年令別・学歴別比率（全体）

学歴 年令	高 卒	短 卒	大 卒	計
18～22	106( 34.1)	23( 21.7)		129( 25.7)
23～29	74( 23.8)	39( 36.8)	39( 34.5)	142( 28.3)
30～39	59( 19.0)	28( 26.4)	29( 34.5)	116( 23.2)
40～49	56( 18.0)	11( 10.4)	13( 15.5)	80( 16.0)
50～59	16( 5.1)	5( 4.7)	9( 10.7)	30( 6.0)
60～			4( 4.8)	4( 0.8)
計	311(100.0)	106(100.0)	84(100.0)	501(100.0)

表(17)-2 年令別・性別比率（全体）

性 年令	男	女	計
18～22	64( 34.0)	65(20.8)	129( 25.7)
23～29	60( 31.9)	82( 26.2)	142( 28.3)
30～39	37( 19.7)	79( 25.2)	116( 23.2)
40～49	11( 5.9)	69( 22.0)	80( 16.0)
50～59	12( 6.4)	18( 5.8)	30( 6.0)
60～	4( 2.1)		4( 0.8)
計	188(100.0)	313(100.0)	501(100.0)

因みに通信大学全体および佛教大学通信教育課程（B大学）における年令区分の分布は以下の表(18)のとおりである。

表(18) 通信大学全体およびB大学の在学者の年令構成比率

年令構成	通信大学全体	B大学全体	B大学男子	B大学女子	通信大学全体の正規の課程の女子
18～22	23.4%	17.8%	20.4%	16.0%	17.4%
23～29	36.3%	32.4%	31.9%	32.7%	37.4%
30～39	23.7%	26.0%	26.9%	25.4%	25.6%
40～49	13.5%	16.6%	12.2%	19.6%	14.4%
50～59	3.7%	5.4%	5.2%	5.6%	4.1%
60～	1.3%	1.8%	3.4%	0.7%	0.8%
備 考	1989年の状況	1991年 7 月 1 日現在在学者の状況			1989年の状況

表(19) 1990年前期入学者で1年在籍し次年度に除籍となた者の内訳

学科 性別 年齢	B			H			L			F		
	男	女	小 計	男	女	小 計	男	女	小 計	男	女	小 計
18～22	6( 28.6)	1( 10.0)	7( 22.6)	10( 76.9)	3( 42.9)	13( 61.9)	3( 50.0)	13( 59.1)	16( 57.1)	22( 73.3)	19( 55.9)	41( 64.1)
23～29	1( 4.8)	1( 10.0)	2( 6.5)	1( 7.7)	4( 57.1)	5( 23.8)	1( 16.7)	5( 22.7)	6( 33.3)	8( 26.7)	6( 17.6)	14( 21.9)
30～39	7( 33.3)	5( 50.0)	12( 59.1)	1( 7.7)		1( 4.8)	1( 16.7)	1( 4.5)	2( 7.1)		7( 20.6)	7( 10.9)
40～49	2( 9.5)	2( 20.0)	4( 12.9)	1( 7.7)		1( 4.8)		2( 9.1)	2( 7.1)		2( 5.9)	2( 3.1)
50～59	4( 19.0)	1( 10.0)	5( 16.1)		1( 14.3)	1( 4.8)		1( 4.5)	1( 3.6)			
60～	1( 4.8)		1( 3.2)				1( 16.7)		1( 3.6)			
計	21(100.0)	10(100.0)	31(100.0)	13(100.0)	7(100.0)	21(100.0)	6(100.0)	22(100.0)	28(100.0)	30(100.0)	34(100.0)	64(100.0)

学科 性別 年齢	E			W			計		
	男	女	小 計	男	女	小 計	男	女	計
18～22	10( 47.6)	21( 75.0)	31( 63.3)	25( 37.3)	20( 15.3)	45( 22.7)	76( 48.1)	77( 33.0)	153( 39.1)
23～29	10( 47.6)	7( 25.0)	17( 34.7)	24( 35.8)	36( 27.5)	60( 30.3)	45( 28.5)	59( 25.3)	104( 26.6)
30～39	1( 4.8)		1( 2.0)	14( 20.9)	31( 23.7)	45( 22.7)	24( 15.2)	44( 18.9)	68( 17.4)
40～49				1( 1.5)	40( 30.5)	41( 20.7)	4( 2.5)	46( 19.7)	50( 12.8)
50～59				3( 4.5)	4( 3.1)	7( 3.5)	7( 4.4)	7( 3.0)	14( 3.6)
60～							2( 1.3)		2( 0.5)
計	21(100.0)	28(100.0)	49(100.0)	67(100.0)	131(100.0)	198(100.0)	158(100.0)	233(100.0)	391(100.0)

ここで表(18)を参考に表(17)-1と表(17)-2をみると次のようなことがいえる。表(18)は通信大学全体および佛教大学通信課程の男女別・年令別の年令構成比率である。佛教大学通信課程における18～22歳の構成比率は男子で20.4%，女子で16.0%である。にも拘らず年令別・最終学歴別（表(17)-1）では高校卒で34.1%，短大卒で21.7%と極めて高く，また年令別・性別（表(17)-2）をみると，18～22歳では男子が34.0%，女子が20.8%と高い数値を示している。こうした点から18～22歳までの高卒のとりわけ男子にあっては単位の修得が困難な者（学力を含む）が多いということを知ることができる。このことをさらに明確に打ち出しているのが次の入学後1年間で除籍になったものの内訳表(19)である。0単位者と同様表(18)に基づいて18～22歳の男子を見るとすべての学科で20.4%をはるかに超えている。平均で48.1%にもなり，男女共で39.1%と高い割合を占めている。

さらに表(19)にみられる391人および0単位者と除籍の関係を表(20)および表(21)によってみると次のようになる。

表(20) 除籍者の単位修得状況（テキスト履修単位のないものの比率）

学科 修得単位	B ( 31)	H ( 21)	L ( 28)	F ( 64)	E ( 49)	W(198)	全体(391)
A 無	23	13	20	45	26	152	279
B 有	8	8	8	19	23	46	112
C 有の内、スクー リング履修単位 のみの者	6	7	7	18	11	33	82
テキスト履修によ る単位の修得がな い者 $\frac{A+C}{A+B} \times 100(\%)$	93.5%	95.2%	96.4%	98.4%	75.5%	93.4%	92.3%

ここに掲げる数値は1990年前期入学者で1年後に除籍になった者の内訳である。391人の内、279人（71.4%）は0単位者であり，112人は除籍者の内で単位を修得している者である。しかし，単位修得者の内，82人（92.3%）はテキスト履修による単位の修得がなくスクーリング履修による単位修得者である。こうしたことからスクーリング履修による単位のみの修得者は次年度において除籍者となる可能性の高いことが窺われる。また表(21)は0単位者と除籍者の関係を1990年前期入学で1年後に除籍となった者から示したものである。

表(21) 0単位の者と除籍者の関係

区分 学科	B	H	L	F	E	W	計
A 0 単 位 者	50	42	40	49	58	262	501
B 除籍者内0単位者	23	13	20	45	26	152	279
$\frac{B}{A} \times 100(\%)$	46.0%	31.0%	50.0%	91.8%	44.8%	58.0%	55.7%

1990 年前期入学者 2,380 人の内、501 人 (21.1%) が 0 単位者である。その 55.7% の 279 人が除籍になっており、0 単位者の除籍になる確率の高いことを示している。

以上、1990 年前期入学の 1 年間に在籍者の状況について述べてきたので次に 1989 年前期入学者 (2 年間に在籍者) の状況について見る。

表(13)-2 で示したように 2 年間で平均で 36.9 単位を修得している。36.9 単位は 0 単位者が 159 人おり、それを除いた実質単位修得者 1,539 人の平均値である。さらに 1989 年前期入学者 (在籍 2 年) 者の学習状況をみると次の表(22)のようになる。

表(22) 1989年前期入学 (在籍 2 年) 者の学習状況 ( ) 内数は男子

区分 学歴 学科	学 歴				0 単 位 者				ス ク ー リ ン グ 単 位 の み の 者				不 合 格 経 験 者				要 履 修	
	高卒	短卒	大卒	計	高卒	短卒	大卒	計	高卒	短卒	大卒	計	高卒	短卒	大卒	計	卒論のみ	卒論と 2 科目以内
B	66 (42)	17 (9)	28 (22)	111 (73)	3 (1)	3 (2)	6 (6)	12 (9)	13 (8)	5 (2)	4 (0)	22 (10)	22 (13)	3 (2)	5 (2)	30 (17)	3 (2)	2 (1)
H	84 (39)	23 (6)	13 (7)	120 (52)	9 (6)	4 (2)	1 (1)	14 (9)	13 (3)	4 (0)	3 (2)	20 (5)	31 (15)	6 (2)	0 (0)	37 (17)	1 (1)	1 (1)
L	83 (10)	32 (3)	8 (0)	123 (13)	8 (1)	1 (0)	1 (0)	10 (1)	19 (3)	6 (1)	1 (0)	26 (14)	36 (5)	19 (1)	3 (0)	58 (6)		
F	178 (72)	29 (7)	11 (6)	218 (85)	9 (5)	3 (1)	1 (1)	13 (7)	16 (13)	6 (2)	0 (0)	22 (15)	43 (16)	14 (3)	5 (3)	62 (22)		3 (1)
E	73 (31)	67 (10)	19 (4)	159 (45)	10 (6)	8 (4)	3 (3)	21 (13)	13 (7)	13 (3)	2 (1)	28 (11)	32 (10)	12 (0)	5 (0)	49 (10)	1 (0)	5 (0)
W	622 (176)	176 (29)	169 (84)	967 (289)	44 (9)	22 (4)	23 (12)	89 (25)	106 (39)	32 (4)	41 (22)	179 (65)	322 (123)	55 (10)	28 (14)	405 (147)	1 (0)	21 (9)
計	1,106 (370)	344 (64)	248 (123)	1,698 (557)	83 (28)	41 (13)	35 (23)	159 (64)	120 (73)	66 (12)	51 (25)	297 (110)	486 (182)	109 (18)	46 (19)	641 (219)	6 (3)	32 (12)

1989 年前期の入学者数は表(10)-2 に示したように 2,588 人である。現在の在学者は 1,698 人で在籍率は 65.6% である。その内、0 単位者は 159 人 (9.4%)、スクーリング履修による単位のみの修得者 297 人 (17.5%)、レポート、科目認定試験不合格による学習停滞者 641 人 (37.8%) がいる。その内、前二者を合計して年令に分布させたものが表(23)である。

表(23) 0 単位者およびスクーリング単位のための履修者の年令別人数

年令 \ 学科	B	H	L	F	E	W	計
18 ~ 22	4	12	10	17	12	41	96
23 ~ 29	5	11	8	7	25	88	144
30 ~ 39	7	4	6	7	7	78	109
40 ~ 49	8	4	8	3	3	51	77
50 ~ 59	7	3	3	1	2	9	25
60 ~	3		1			1	5
計	34	34	36	35	49	268	456
对在学者比率	30.6%	28.3%	29.3%	16.1%	30.8%	27.7%	26.9%

表(4)および表(8)の傾向からみても、0単位者やスクーリング単位のための修得者はこのままの状態では学習が進展しなければ、2～3年後にはほとんど除籍対象者となってドロップアウトすることが確実視される。

以上、1990年前期および1989年前期の入学者を中心にその学習状況と除籍とを関連させながら分析を行なったが、現在25年間在籍する者もいることから、10年以上に亘る長期在籍の状況について概観したい。

## 5. 長期在籍者の状況

表(24)

	男	女	計
1年次入学者	71	141	212
編入学者	24	51	75
計	95	192	287

10年以上(1966年～1981年の間の入学者)の在籍者は287人である。その内訳は表(24)のとおりである。

287人のうち、0単位者が7人(2.4%)いる。彼らの入学前の学歴は高卒1人、短卒2人、大卒4人であり、男子5人、女子2人である。またスクーリング履修による単位の修得のみの者が16人(5.6%)で、レポート、科目最終試験を不合格となり学習停滞のまま在籍している者が164人(57.1%)もいる。さらに卒業論文とあと1～2科目テキスト履修を完了すれば卒業できる者が88人(30.7%)と多く、かつ卒業論文のみで長期に亘って在籍している者が36人(12.5%)に及んでいる。

単位の修得状況の面からみれば187人(65.2%)が卒業所要単位の5分の4以上修得している。

10年以上の在籍者の内で先に述べるように36人が卒業論文を残すのみであり、また1～2科目と卒業論文のみの者が88人いる。また表(9)の除籍者の内訳にも記載するように五期の間でこうした状況に該当する者が132人いる。卒業論文の作成は本科生にとって最も重圧のかかる事項である。1991年5月1日現在、卒業論文題目を提出し指導教授のもとで作成に向っている者が2,233人である。四回生以上の学生数は6,252人で題目提出率は35.7%である。残り4,019人は論文作成に未着手である。論文をスムーズに進めている者は極めて少なく、論文とはどのようなものかもわからず、自己の関心や興味だけで題目を決定し、以降全く進展しないままにいる者が多いことは題目提出者と卒業者数の関係からもうかがい知ることができる。卒業生へのアンケートからも知られることであるが、「卒業論文作成にあたり一番苦労した点は何か」の問いに対して①資料・文献の収集がトップで次いで②当初書き方がわからないなどが高い率であげられていることからしても、スクーリング所要単位の修得が完了しても指導教授の担当講座の受講を認めていく方法も論文作成にむけての一助となると考えられる。また指導方法の一つとして学生の内に無職の占める割合の高いことから通学課程における卒論ゼミの受講を許可する方法なども考えられる。こうした点が困難であれば、指導教授と担当事務局との連携を図って論文作成に関わる資料等の送付などの便宜を検討する段階に来ていると思わ

れる。

## 6. おわりに

大学通信教育が生涯学習社会にいかに対応すべきかを一貫して考えていく上で、開放された大学をさらに社会に開放する、すなわち学習者のニーズに適切に応えていくためにはいかにあるべきかも検討する必要がある。その基礎的な研究としての現状分析は学習者の問題を明らかにすることであり、即それが大学にとっての課題であることになる。

本論では卒業率の低いことと中途でのドロップアウトの多いことに着眼し、主として学習者の状況をドロップアウトと深い関係にあると考えられる①0単位者、②単位修得者の内でスクーリング履修による単位のみ修得者および③レポート、科目認定試験不合格による学習停滞者等を分析してみた。

その結果、①の半数以上は除籍者となり、②は除籍者となる確率が高いことが明らかとなった。従って①、②の該当者には学習方法を身につけさせ、かつ学習意欲の昂揚を図るためにもスクーリングの早い時期の受講を促すことや入学直後に適切な学習への導入が必要であること。③について添削指導の学習者の学習報告内容に即した具体的な指導、が必要であることなど指摘することができる。また卒業論文については可能な限り指導教授との接触が図れる方策を検討すべきことなども明らかとなった。

さらには若年層が増えて来ている状況の中で18～22歳の高卒者への対応が特に必要となっていることも指摘できよう。通信教育による学習の主流はテキスト履修である。そのためにもいかに自学自習によってレポートを作成できるかが通信課程で目標を達成するか否かの鍵を握っている。自学自習に適したテキストなのかどうか、こうした点も今後分析を必要とするし、教材の開発もこれからの大学通信の存亡を大きく左右させるようである。

いずれにせよ、学習者の学習上の課題は大学の課題であることには誤りはない。課題解決がひいてはドロップアウトの減少と卒業率のアップにつながるといえる。

### 注

- 1) 木田宏著『生涯学習時代と日本の教育』p145～参照。
- 2) 私立大学通信教育協会が昭和63年度に第4回『大学通信教育学生生活実態調査』を刊行している。
- 3) 昭和62年度、63年度の2年にわたって単純集計およびクロス集計とあわせて、通信教育学生の学習動向の現状と課題を呈示している。
- 4) 「除籍」とは学費未納により（就学意志の確認を学費の納入でおこなっている）、学籍を抹消されることをいう。
- 5) 拙稿「大学通信教育の現状と課題(1)」『佛教大学教育学部論集』第2号所収参照。
- 6) 5)と同じ。